

防人が悲別の心を追ひて痛み作る歌一首 井
せて短歌

四三三一番

大君 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国は 敵守る おさへの城そと
聞こし食す 四方の国には 人さには 満ちてはあれど 鶏が鳴く
東男は 出で向かひ 顧みせず 勇みたる 猛き軍士と ねぎた
まひ 任けのまにまに たらちねの 母が目離れて 若草の 妻をも
まかず あらたまの 月日数みつつ 葦が散る 難波の三津に 大舟に
ま權しじ貫き 朝なぎに 水手整へ 夕潮に 梶引き折り 率ひて
漕ぎ行く君は 波の間を い行きさぐくみ ま幸くも 早く至りて
大君の 命のまにまますらをの 心を持ちて あり巡り 事し終は
らば 障まはず 婦り来ませと 齋盆を 床辺にすゑて 白たへの
袖折り返し ぬばたまの 黒髪敷きて 長き日を 待ちかも恋ひむ
愛しき妻らは

四三三二番

ますらをの 鞞取り負ひて 出でて行けば 別れを惜しみ 嘆きけむ
妻

四三三三番

鶏が鳴く 東男の 妻別れ 悲しくありけむ 年の緒長み